

序

わが国の死因第1位を占める悪性新生物、いわゆる“がん”の最終診断は組織学的検査によって行われている。一方で、細胞診は“がん”の早期発見、早期治療において不可欠な検査法であり、症例によっては確定診断としての役目も果たしている。対象臓器は婦人科・呼吸器・泌尿器のほか、穿刺吸引細胞診によって乳腺、甲状腺、唾液腺、肝臓、膵臓、リンパ節など多数の臓器に施行され、その診断学的価値はきわめて高いと言える。

さて、『臨床検査技師を目指す学生のための細胞診』の刊行（2007年）から6年余りが過ぎようとしている。その間、病理診断をめぐる環境は、著しい変化を遂げており、2008年には厚労省通達により病理検査が内科・外科などと同列の標榜科「病理診断」として移動・認可され、2012年の診療報酬改定では新たに病理診断管理加算が、組織・細胞診検査それぞれに認められた。これは所轄官庁においても病理診断の重要性が広く認知されるようになってきた所以と考えられ、その重要性は今後益々高まってくると思われる。それに伴い、当然のことながら病理検査に従事する臨床検査技師の技術向上も求められると推測される。この度、2013年6月に厚生労働省医政局医事課より「平成27年臨床検査技師国家試験出題基準」が公表された。これを機に初版の内容を一新し、新たに改訂新版を企画した。執筆にあたっては、臨床検査技師を養成する大学および短期大学で教鞭をとり、また細胞検査士として第一線で活躍されている方々をお願いした。

本書は3部構成からなっており、第1部は総論、第2部は各論、第3部は国家試験対策である。総論では「検体採取法」、「検体処理」、「固定法」等について解説し、各論では各臓器別にそれぞれの細胞像を鮮明な写真で提示している。第3部の国家試験対策では、第37回～第59回の国家試験問題の要点、文章問題とその解説、写真問題を抜粋掲載したうえで、練習問題・模擬試験も新たに作成した。学生諸君が受講する講義は無論のこと、国家試験対策の専門書としても幅広くご利用いただけるものと考えている。

最後に、本書を出版するにあたりご協力をいただいた医療科学社の齋藤聖之氏と小柳晶子氏はじめ関係各位に心より謝意を記し、結びとしたい。

2013年10月吉日

社会医療法人 栗山会 飯田病院 副院長 兼 病理診断部長
日本医科大学 特任教授

土屋 眞一